

輸送経済

6/24

THE YUSO-KEIZAI

第2803号 昭和24年4月23日 (第三種郵便物認可)

平成20年
(2008)
(火曜日)
週刊

拠点進出相次ぐ博多港

福岡倉庫、白杵運送、山九ら

国際海上コンテナの取扱量が過去最高を更新するなど成長が続く博多港(福岡市)。その背後地には、港の将来性を見込んで物流施設の進出が相次いでいる。

平成十九年のコンテナ取扱量は、前年比五割増の七十四万七千TEU(二十フィートコンテナ換算)を記録。なかでも対アジアの輸出入の成長は目覚ましい。

中国・韓国など発着の割合は五割近くにのぼる。貨物需要を取り込むと、東アジアの玄関口に物流施設が殺到している。地域の企業が新たな

山九(本社・東京、中村公一社長)は延べ床面積二万八千平方メートルの「福岡物流センター」を開設。拡大する福岡地

福岡倉庫(本社・福岡市、宮永太郎社長)は、福岡市湾岸の箱崎ふ頭地区に四階建て延べ床面積二万七千平方メートルの物流センターを開設。既存顧客の業務を集約したほか、今後の需要をにらみ先行的に投資したという。

博多港を取り囲む福岡市湾岸地区では、地価や施設賃借料が上昇傾向にあるという。早めの進出で優位性を確保したい企業の進出が今後も相次ぎそうだ。

区での業務に対応するという。貨物需要の将来性の高さは、不動産ファンD系の進出ラッシュにも見て取れる。日本レップは、同地区に総延べ床面積約七万平方メートルの二棟の施設を開発。イヌイ建物は、新たな開発地区のアイランドシティ港湾関連用地に約十五万平方メートルの物流センターを建設する。